

視 角

「子どもの視点」に立つ

嶺村法子

遠足の朝

集合場所で待っていると、「A君が行きたくないと言つて、お母さんを困らせている」と職員から聞かされる。いつも数人の男児を引き連れ、サッカーや鬼ごっこのリーダーとして元気いっぱいA君の、あまりにも普段と違う姿に何事かという事態である。

母親に聞いてみると、バスに酔いやすい子どもたち数名は、前方に固まって乗るといふ話をしたら、怒り出したと言ふ。私はすぐに、「担任の先生は、好きな場所に座つていいことにしたつて、さつき言つたよ」と声をかけた。もちろん、とっさのひと言である。自分が「特別扱い」のその中に入つてゐることが、きつと許せなかつたのだろう。A君の

プライドが傷ついたことは、容易に想像できた。

「絶対、行かない」「帰る」「何で行かなきゃいけないんだ」と泣き叫んでいるA君に、「わかつた。無理やり連れて行つたりしないから」と声をかけ、飛び出そうとする体を抱きかかえ、落ち着くのを待つ。

遠足に行かないで「どうしたいのか」尋ねてみる。

A君は、「一人で家に帰る」と言ふ。「一人じゃ帰れないから、お母さんも一緒だよ。しょうがないから、お弁当は、家でお母さんと食べるか……」とつぶやくと、しゃくりあげながら、「カギを捨てて、お母さんは入れなくする」「一人で食べる」と言ふ。A君なりに精いっぱい考えては、理屈を言ふ。「そっか、そんなに行きたくないんだ……こんなにいいお天気なのに……残念だね……」。その気持ちを受け止めつゝ、私の気持ちも伝える。

今振り返ると、この一連のやりとりの中で、無理に行かなくてもいいけれど、でも「私はA君と一緒に行きたい」という思いをもち続けていたし、私の中に、A君はきつと一緒に行くことを選ぶだろうと

「いう確信が生まれていたように思う。」それじゃあ、家でお母さんと一緒にお弁当を食べるか、遠足に行つてみんなと食べるか、どっちにするかA君が選んでね」と選択肢を示す。そして、「こんなに遅くなつたんじゃ、もう前の席しか空いていないかもね……」とつぶやいてみる。

A君は、しばらく「絶対行かない」を繰り返してしたが、徐々に感情の波がトーンダウンして、理性で考え始めているのが感じられた。そして突然、「わかつたよ、行つてやるよ」とバスに向かつて歩き始めた。ぶつぶつ文句を言いながら、「やっぱり帰る」と立ち止まりながらも、足はバスに向かつている。私は、母親に目配せをして、後ろからついて行く。

バスに乗ると、案の定、前の席しか空いていなかった。A君は憤慨したが、「遅く来たんだからしょうがないね。帰りは一番に乗つて、後ろの席に座つたら」ととりなしているうちに、一緒に座りたいと言つていたB君が「いいよ」とA君の隣に来てくれたお陰で、すんなり着席することができた。

その後は、驚くほどあつという間に、いつものA君に戻り、バスの中でも積極的に発言し、結局、往復とも一番前の席に座り、具合が悪くなることもなく、バス酔いなどこ吹く風で、遠足が終わつた。

子どもの視点

「乗り物に酔いやすい幼児を、前の席に座らせる」のは、そのほうがいざという時に介抱しやすいからであるし、後方よりは振動が少なく酔いにくいという理由からだろう。今まで何十回と遠足の引率をしてきて、前の席に座るよう配慮されることをこんなに嫌がる子どもに出会つたのは初めてだった。

しかし、特別に配慮されることで、自分が弱者になつたように感じる子どももいるのだろう。普段、精いっぱいリーダーを演じているのに、乗り物酔いなんかで！一緒に座りたい友達と座れないなんて！という気持ちもあるかもしれない。

遠足の朝の慌ただししいひとときにも、しっかりと「子どもの視点」に立つことが求められる。

『幼児の教育』リニューアルに寄せて

このテーマを頂いた時に、真っ先に思い浮かんだのは、大学時代、徹底して「子どもの側に立つ」ということを語り、自ら実践し、私たち学生を教え導いてくださった先生方のことである。講義で、演習で、実習で、「どんな時でも、子どもの側に立ち、子どもの味方になる」とはどういうことか、常に問いかけられ、そのように実践することを求められた。

児童学を学ぶ日々の中で、それが当たり前のこととして身に染み込み、保育者としての根っこを形成していたのだと気づいたのは、就職し、時に保育観の異なる人々と出会い、当たり前と思っていたことが通じない経験を重ねて後のことである。「何かが違う」と感じながら、それが何なのかよくわからなのままに保育者としての日々を送ってきて、「ああ、よって立つ最も根本の、まさに根っこが違うのだ」と、いつのころからか思うようになった。

そして、同じ保育者でありながら、私とは異なる

根っこをもつ人々に出会うことによって、そうした人々からの問いに答える努力によって、私は、それまで以上に、「子どもの側に立つ」ことを意識し、自ら実践していく道を選び取ってきたように思う。

まさに、他者との出会いによって、保育者としての「私」が誕生し、「私」の輪郭が形作られてきたのである。そして、今なお現在進行形の出会いの中で、「どうすれば子どもの側に立てるようになるのか」と問い続ける私がいる。それは取りも直さず、「子どもの視点」に立つとはどういうことか、語り、実践し、身をもって伝えるということが、私自身に課せられているということである。恩師の教えを体現し、発信し得ているかどうか、日々問われている。

大学時代の出会いと学びは、その人の保育者としての根っこを形作る。しかし、現場での出会いと学びもまた、その根の上に新しい幹を接いでいく力になると信じて、後進の問いに答え続けたいと決意を新たにする春である。

(東京都 公立幼稚園)